

岩手県立雫石高等学校
部活動における安全対策マニュアル

令和7年8月改訂

1 学校における安全管理体制の構築

運動部部活動においては、全教職員・部活動指導員・外部コーチ・生徒が部活動の意義と方針を理解し、部活動におけるルール作りや情報共有を行い、関わる全ての者の協力体制のもと、組織的に取り組み、安心・安全な活動を行う必要がある。

2 事故防止のための安全に配慮した適切な指導

(1) 健康観察

定期健康診断の結果や生徒・保護者からの申し出を含めた情報を確認したうえで、生徒の健康観察を行い、生徒の健康状態を正確に把握する。既往症や心疾患等については、学校・保護者・医師等が連携を図っていくことが重要である。

日頃より健康管理や望ましい生活習慣、水分補給等の指導も行い、安全に活動ができ、生徒自身も体調等に不安がある時には活動を控えるといった指導を行う必要がある。

顧問の教員だけでなく、部活動指導員・外部コーチと情報の共有を図り、連絡を密に行う。

(2) 指導計画

生徒の発達段階や能力に応じて無理のない指導計画を立て、活動内容についても周知したうえで活動を行う。危険が内在する活動については、事前に事故防止の指導を行い、危険を回避する能力も育成する。生徒の身体的な発達状況や技術の習得状況も把握し、安全な活動を行えるよう計画を立てる。繰り返し行われる練習においては、危険予知の感覚が薄れるため、不断なく事故防止の指導を行う。

(3) 顧問間の共通理解、連携・協力

部活動は、顧問立ち合いのもとに行うことが原則であり、やむを得ず立ち会えない場合は他の顧問の教員と連携・協力する。その際に、生徒に対し具体的に練習内容や練習方法を指示し、安全面に十分留意した内容や方法で活動を行う。部活動指導員・外部コーチとも共通理解を図り、連携・協力しながら活動を行う。

3 日常の活動に潜む危険性（複数の部で活動場所を共有する際の安全確認と対策）

部活動の活動場所については、安全を確保するため、個別に設定しているが、やむを得ず同一箇所で活動を行う場合には、事前に顧問同士が禁止事項や制限事項を確認し、安全が確保される活動を計画する。また、予見される危険を確認し、生徒に伝えるとともに、境界となるラインの設定、ネットを張るといった危険を回避する方策を講じる。顧問間、生徒だけでなく、部活動指導員・外部コーチにも徹底する。活動終了後にも危険が存在しなかったかを生徒や顧問間で確認し、次の練習に生かす。

4 施設・設備・用具等の安全点検と安全指導

毎月行われる安全点検だけでなく、日頃より活動場所の点検を行う。生徒にも施設・設備・用具等の状況を確認し、安全な活動を行う。事故の未然防止に向けて、修繕を行い、危険が予知される場合には活動場所を変更するなど速やかに対応を行う。

5 熱中症対策について

屋外行動のための目安である WBGT を基準とし、指数を確認しながら、生徒の安全に十分に配慮し、活動内容を決定する。教職員、部活動指導員・外部コーチとも共通理解を図り、安全な活動を行う。指数そのものが低い場合でも、周囲の環境、当日の体調、活動内容など十分に注意して、熱中症による事故が起こらないようにする。また生徒自らが、熱中症の危険を予知し、安全確保を行うことができるような指導も行う。

WBGT を基準とした判断は活動日当日、管理職と生徒指導主事にて行う。

6 落雷への対応

屋外で活動する部活動においては、日常的に天気予報や落雷注意報についての情報の収集に努める。また、活動前に最新の情報を確認し、落雷が予想される場合には屋外での活動を行わないこととする。

活動中に雷鳴が轟いたり、雷光が見えたりした場合、また雷雲が近づいた時は速やかに活動を中止し、屋内の安全な場所に避難させる。屋外で活動する際には、避難する場所が確保できることを前提とするが、確保できない場合は教職員・部活動指導員・外部コーチの車両へ避難する。

雷鳴が鳴りやんでも、30 分程度は落雷の危険性があることから、安全な屋内で待機し、最新の情報を収集する。学校敷地外で活動する場合には、教職員・部活動指導員・外部コーチが常に学校と連絡を取れる体制を整えておく。

大粒の雨や雹、突風が吹いた、また竜巻の発生可能性が生じた場合も同様の対応を行う。

7 熊などの野生動物への対応

(1) 屋内での活動の場合

熊などの危害を及ぼす野生の動物が接近した時には、生徒を建物の上階など安全が確保される場所に避難させる。その上で、教職員・部活動指導員・外部コーチが安全確保に努めながら、活動場所の扉や窓を閉め、動物の侵入を防ぐ対策を講じる。自治体や関係機関から発せられる情報を収集するとともに、関係機関および他の教職員と常時連絡を取れる体制を取り、安全が確保されるまでは活動を休止する。必要に応じて保護者の迎えの依頼等を行い、生徒が安全に帰宅するための対策を講じる。

(2) 屋外での活動の場合

熊などの危害を及ぼす野生の動物が接近した時には、即座に活動を休止し、生徒を建物の中に避難させる。可能な限り上階に避難をさせ、教職員・部活動指導員・外部コーチは避難場所の関係者と情報を共有しながら、扉や窓を閉めるなど、安全確保に努め、動物の侵入を防ぐ対策を講じる。自治体や関係機関から発せられる情報を収集するとともに、関係機関および学校や他の教職員と常時連絡を取った上で、必要に応じて保護者の迎え依頼等を行い、生徒が安全に帰宅するための対策を講じる。学校敷地外で活動する際には、避難する場所が確保できることを前提とするが、確保できない場合には、教職員・部活動指導員・外部コーチの車両へ避難する。

【WBGT】暑さ指数

○危険 WBGT 31 以上 湿球温度 27 °C以上 乾球温度 35 °C以上

【運動は原則中止】 特別の場合以外は運動を中止。

○嚴重警戒 WBGT 28～31 湿球温度 24～27°C 乾球温度 31～35°C

【激しい運動は中止】 熱中症の危険性が高いため、
激しい運動や持久走など体温が上昇しやすい運動は避ける。
10～20 分おきに休憩をとり水分・塩分の補給を行う。

○警戒 WBGT 25～28 湿球温度 21～24°C以上 乾球温度 28～31°C

【積極的に休憩】 熱中症の危険が増すため、積極的に休息をとり適宜、
水分・塩分を補給する。
激しい運動では 30 分おきくらいに休憩をとる。

○注意 WBGT 21～25 湿球温度 18～21°C以上 乾球温度 24～28°C

【積極的に水分補給】 熱中症による死亡事故が発生する可能性があるため、
活動の内容を十分考慮する。
熱中症の兆候に注意するとともに、運動の合間に積極的に
水分・塩分をとる。

○ほぼ安全 21 未満 湿球温度 18°C未満 乾球温度 24°C未満

【適宜水分補給】 通常は熱中症の危険は小さいが、適宜水分・塩分の補給を必ず行う。

○授業中の事故（体育）・部活動中の事故

（熱中症も含む 対応説明中の「負傷」を読み替えるものとする）

危機発生時の対応

校長（副校長）	担当職員	養護教諭	応援依頼を受けた職員
	・生徒の意識の有無、顔色、呼吸、脈拍などを確認。 ・負傷した生徒への応急処置。 ↓ ・周囲にいる教職員・生徒に「校長（副校長）、養護教諭、他職員への連絡」依頼。		
・保健厚生課職員及び他の職員（可能な限り担任又は副担任を含む）に応援を指示。 ・負傷の程度により救急車の出動要請を指示（119 番）。	・他の生徒を、救急活動の障害にならない場所に移動させる。	・負傷した生徒の応急処置。 ・保護者に事故の概要を報告。 →希望する病院があるか確認 ※事故への対応の経過、本人の状況など事実のみを伝える（見込みの話は厳禁）。 希望する病院がない場合、救急隊が搬送先を決定する。保護者には第 2 報で伝える。	
・担当教員、生徒から事情を聞き、事故の経緯を正確に把握し記録する。 1 概要（5 W1H） 2 経過、対応、現在の状況 ↓ ・重大事故の場合は速やかに県教委に第 1 報を入れ、指示を受ける。	・他の生徒の動揺を抑える。 ↓ ・救急車の進入路の確保。 ・救急隊員を負傷者まで誘導。 ↓ ・救急車に同乗または別途、搬送先の病院へ向かう。（※付添う職員数は負傷者の状況による） 【病院において】 ・医師に事故発生時の状況や応急処置の状況を説明。 ↓ ・医師から負傷の状況、診断、治療内容等を聞き、校長（副校長）へ連絡。	・救急車到着までの間、心肺蘇生法等必要と認められる場合は的確に実施。 ・状況により学校医に連絡。 ↓ ・救急隊員に応急措置の状況等を説明。	・救急車の進入路の確保。 ・救急隊員を負傷者まで誘導。 ・他の生徒の動揺を抑える。 ↓ ・搬送先の病院へ向かう。 ・保護者に事情等を説明し、生徒を引き渡す。

安全対策のポイント

バドミントン部

予想される危険	・けが防止に対する生徒の意識が低い。 ・活動中に隣のコートで体を動かしている生徒のボールが飛んできてぶつかる。
事故防止対策	・顧問から、けがに対しての注意喚起を徹底する。 ・コート間のネットを必ず引き、他のコートへボール等が入らないように徹底する。 ・準備運動や基本練習を確実に行う。

ボート部(ローイング)

予想される危険	・御所湖で水上練習をおこなう場合、ボートがひっくり返る場合がある。 ・水上練習中、天候の急激な変化が考えられる。(風・雷・雨等) ・用具の不備、救命胴衣の着用を忘れて、ボートに乗ってしまう可能性がある。 ・夏の湖上での熱中症の危険がある。
事故防止対策	・用具の点検、水分、救命胴衣の着用について、必ず確認をする。 ・天候の急変が考えられる場合、早めに判断し水から上がる、または水上練習はしない。 ・気象情報を細かく確認し、危険回避を行う。 ・救助艇にも水分を予備として乗せる。

特設スキー部

予想される危険	・雪上練習中、転んで骨折する危険性がある。
事故防止対策	・ヘルメットを着用する。 ・練習前の健康状態の確認と準備運動を確実にを行う。